


## 園の実践事例紹介～「科学する心」を育てる～

いのちをいただくこと／学校法人立山学園 みんなの森こども園（大分県）

園外のような人とのかかわりを通して豊かな経験を広げていく子どもたち。大分県みんなの森こども園では、地域の農家さんに田んぼの土と苗を分けていただき育てる過程で、自分たちが日頃食べているお米に対する愛着が芽生え、お米と水、太陽との関係性や、食すこと、命をいただくことの意味を感じていきます。



### お米を育ててみよう！／4歳児


 バケツに苗を植えてみよう！（6月中旬～6月28日）

6月中旬、地域の農家さんの誘いで、田植え見学に行った。子どもたちからは、「これがお米の赤ちゃん？」「本当にお米ができるん？」と疑問の声。農家さんからバケツでも稲が育つことを教わると子どもたち「やってみたい！」とバケツ稲作りがはじまった。

6月28日、農家さんから、田んぼの土と苗を分けていただく。土の混ぜ方や苗の植え方などを教えてもらい、友達と交代しながら苗植えを行う。農家さん「秋になったら…10月頃かな？お米が収穫できるよ」の言葉に、収穫を待ち望む姿が見られた。バケツ苗は、子どもたちが登降園の際に保護者と一緒に観察できるように、玄関の近くに置いた。



お米になるの？

 稲がどうなったら収穫できるの？（9月25日～10月2日）

9月下旬にかけて稲穂は少しずつ黄色くなっていった。苗植えの時に、収穫は10月と聞いていたので、「もうすぐ10月だね」「早く取りたいな」と、収穫への期待を膨らませる姿が見られた。概ね稲穂が黄色になった頃、保育者「あとどのくらいで収穫できるかな？」と尋ねると、「全部が白くなったら？」「10月になったらもういいんじゃない？」「でも緑もまだあるけん、それはダメで。美味しくないよ」など様々な意見が出た。そこで、お家の人にも意見を聞いてみることになった。

翌日、Iくんが、「お米はお辞儀するまで待つって」と教えてくれる。Iくんの母親は、「じいじが、穂が垂れることを教えてたんです」と笑っていた。クラス全体に伝えて、穂が垂れるまで様子を見ることになった。

10月「わ、やっぱり10月になったけん、前よりお辞儀したね」「白のお米が増えた！」と喜ぶ子どもたち。

「前はこう（真っすぐ気を付けの姿勢）やったんに、こんなに曲がったね」と、自分の体を使って、稲の変化を表現していた。



お米みたいにお辞儀！

### 保育者の思い

子どものつぶやきの中に、「やっぱり」という言葉があった。この発言から、子どもたちは10月になると稲がお辞儀をするのではないかと予想していたことが分かる。自分で考えたり友達と話したりしている中で、言葉に発していなくても、自分なりに予想したり、結果を繋げて考えていることが分かり、常に子どもたちは「科学する心」を持ち、想像力や思考力を深めているのだと考えられる。

10月17日、ようやく収穫の日を迎えた。子どもたちは安堵の表情を浮かべたり、しっかりと育てているか不安に感じたりする姿も見られ、大事に育てる中でお米への思いが強くなったことを改めて感じた。同じバケツの中でも色が違う稲があったことで、なぜ色が違うのか、その理由も考えている子どもたちを見て、様々なことに気付き、疑問を感じ、自分なりに考え、友達に伝えようとするのは、まさに「科学する心」の育ちの一場面であると感じた。

## お米の変身！生きてるお米を大事に食べよう！（10月18日）

お米の収穫をしたことで、その日の給食では「このご飯も誰かが剥き剥きしたのかな？」「（箸ですくって）このご飯は何個（粒）あるんやろ？」など、普段食べているお米に対しての興味や疑問が広がっていた。収穫とモミ殻むきをした翌日、炊飯の様子やお米の変化がよく見えるように、褐色透明のガラス鍋を使用した。給食の職員と共に、苗の仕組みや稲になるまでの過程など、これまでの活動内容を振り返った。



お米の音が聴こえるよ！

お米を炊くまでの手順も子どもたちと共に確認しながら、お米が炊けていく様子を見守った。鍋の水が沸騰してくると、「泡がでてきた！」「泡が踊ってるみたい」「ボコボコ音になってる」「お米が溺れてるよ」などと、思い思いに発見したことを言葉にする。

K児「お米がしゃべってる！」「お米って生きてるんやな」と話す。

N児「お米が上にあるね。はじめは水のほうが上やったんに」という言葉に、「水が少なくなっちゃん」と気付いた子どもたち。

保育者「水はどこにいったのかな？」と問いかけると、子どもたち「シャボン玉になった？」「泡になって消えたんじゃない？」「鍋の下に入ったのかな？」などと言う中、

S児が、「お米が食べたんやない？」と言った。すると、周りの子どもたちも「あ、お米が飲んだ！」「そういうことか、お米の中に入ったんや！」「水やりの時も飲むの早かったよね」と発見が膨らむ。ご飯が炊けると、「始めは固くて小さかったんに、大きくなったのすごい」「いいにおい～」「見ただけでフワフワ～」と、お米の変化に感動しているようだった。

その後、「野菜もお肉もお魚も、育てたりとったりしてくれる人がいて、料理をしてくれる人がいるからご飯が食べられる」「**お米は命やな！**」「1個ずつお米の皮剥くんかな？絶対大変で」「お魚は海に釣りに行くんでな」「全部きれいに食べんともったいない」などと、お米だけではなく食材や、関わる人々を大切に思う気持ちを言葉で表現していた。



おいしい！

## 保育者の思い

「食」は身近な生活習慣の1つだからこそ、大人にとっては日常であり当たり前前に感じてしまう。しかし、子どもにとってはすべてが新鮮であり、だからこそ発見し、驚きや感動を得るのだろう。子どもならではの発見や感動を味わうことで、「科学する心の芽生え」が生まれるのではないかと考えられる。